

お客様各位

ZUD F35 10 0208

2011年 03月 31日

ルネサス エレクトロニクス株式会社  
MCU 事業本部  
ソフトウェア統括部  
MCU ツール技術部

RL78 マイクロコントローラ  
フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ  
Type01 Ver.2.00  
使用上の留意点  
(暫定)

ご使用前に必ずお読みください

## 【 目 次 】

1	制限事項 .....	3
2	アプリケーション・ノート .....	5
3	動作環境 .....	5
4	対応ツール .....	5
5	ソフトウェア・リソース .....	6
6	フラッシュ・セルフ・プログラミング中の処理時間 .....	9
6.1	フラッシュ関数処理時間.....	9
6.1.1	ステータス・チェック・ユーザ・モード .....	9
6.1.2	ステータス・チェック・インターナル・モード.....	12
6.2	FSL_StatusCheck(ステータス・チェック)推奨間隔時間.....	15
7	インストール .....	19
7.1	インストール方法 .....	19
7.2	アンインストール方法.....	19
7.3	ファイル構成 .....	19
8	ビルド方法 .....	20
8.1	使用するソフトウェア.....	20
8.2	CubeSuite でのビルド方法 .....	20
8.2.1	C言語の場合 .....	20
8.2.2	アセンブリ言語の場合 .....	25
9	デバッグ方法 .....	29

この添付資料では、本製品のバージョンによる差分などについて記載しています。ご使用前に必ずお読みください。

- ・ Windowsは、米国Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ・ PC/ATは、米国IBM社の商標です。

# 1 制限事項

フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリのご使用時において以下の制限があります。

No.	内容																								
1	<p>・割り込みベクタ変更処理の制限について</p> <p><b>【制限内容】</b></p> <p>下記に示す「表 1. 割り込みベクタ変更機能 - 制限事項対応表」の「制限該当サンプル」一覧に記載のある RL78 マイクロコントローラでは、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリの制限により、割り込みベクタ変更処理を正常に動作させる事が出来ません。従いまして、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリで提供している以下のフラッシュ関数を使用しないで下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ FSL_ChangeInterruptTable</li> <li>・ FSL_RestoreInterruptTable</li> </ul> <p style="text-align: center;">表 1. 割り込みベクタ変更処理 - 制限事項対応表</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>RL78/G13 のピン数 : 型名</th> <th>フラッシュ・メモリのサイズ</th> <th>制限該当サンプル (旧バージョン)</th> <th>非該当サンプル (新バージョン)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>20 ピン : R5F10x6 24 ピン : R5F10x7 25 ピン : R5F10x8</td> <td>16KB ~ 64KB</td> <td>Ver.2.1 以前</td> <td>Ver.3 以降</td> </tr> <tr> <td>30 ピン : R5F10xA 32 ピン : R5F10xB 36 ピン : R5F10xC</td> <td>16KB ~ 64KB 96KB , 128KB</td> <td>Ver.2.1 以前 Ver.1</td> <td>Ver.3 以降 Ver.2 以降</td> </tr> <tr> <td>40 ピン : R5F10xE</td> <td>16KB ~ 64KB 96KB ~ 192KB</td> <td>Ver.2.1 以前 Ver.1</td> <td>Ver.3 以降 Ver.2 以降</td> </tr> <tr> <td>44 ピン : R5F10xF 48 ピン : R5F10xG 52 ピン : R5F10xJ 64 ピン : R5F10xL</td> <td>16KB ~ 64KB 96KB ~ 256KB 384KB ~ 512KB</td> <td>Ver.2.1 以前 Ver.1 非該当</td> <td>Ver.3 以降 Ver.2 以降 全バージョン</td> </tr> <tr> <td>80 ピン : R5F10xM 100 ピン : R5F10xP 128 ピン : R5F10xS</td> <td>96KB ~ 256KB 384KB ~ 512KB 192KB ~ 512KB</td> <td>Ver.1 非該当 非該当</td> <td>Ver.2 以降 全バージョン 全バージョン</td> </tr> </tbody> </table>	RL78/G13 のピン数 : 型名	フラッシュ・メモリのサイズ	制限該当サンプル (旧バージョン)	非該当サンプル (新バージョン)	20 ピン : R5F10x6 24 ピン : R5F10x7 25 ピン : R5F10x8	16KB ~ 64KB	Ver.2.1 以前	Ver.3 以降	30 ピン : R5F10xA 32 ピン : R5F10xB 36 ピン : R5F10xC	16KB ~ 64KB 96KB , 128KB	Ver.2.1 以前 Ver.1	Ver.3 以降 Ver.2 以降	40 ピン : R5F10xE	16KB ~ 64KB 96KB ~ 192KB	Ver.2.1 以前 Ver.1	Ver.3 以降 Ver.2 以降	44 ピン : R5F10xF 48 ピン : R5F10xG 52 ピン : R5F10xJ 64 ピン : R5F10xL	16KB ~ 64KB 96KB ~ 256KB 384KB ~ 512KB	Ver.2.1 以前 Ver.1 非該当	Ver.3 以降 Ver.2 以降 全バージョン	80 ピン : R5F10xM 100 ピン : R5F10xP 128 ピン : R5F10xS	96KB ~ 256KB 384KB ~ 512KB 192KB ~ 512KB	Ver.1 非該当 非該当	Ver.2 以降 全バージョン 全バージョン
RL78/G13 のピン数 : 型名	フラッシュ・メモリのサイズ	制限該当サンプル (旧バージョン)	非該当サンプル (新バージョン)																						
20 ピン : R5F10x6 24 ピン : R5F10x7 25 ピン : R5F10x8	16KB ~ 64KB	Ver.2.1 以前	Ver.3 以降																						
30 ピン : R5F10xA 32 ピン : R5F10xB 36 ピン : R5F10xC	16KB ~ 64KB 96KB , 128KB	Ver.2.1 以前 Ver.1	Ver.3 以降 Ver.2 以降																						
40 ピン : R5F10xE	16KB ~ 64KB 96KB ~ 192KB	Ver.2.1 以前 Ver.1	Ver.3 以降 Ver.2 以降																						
44 ピン : R5F10xF 48 ピン : R5F10xG 52 ピン : R5F10xJ 64 ピン : R5F10xL	16KB ~ 64KB 96KB ~ 256KB 384KB ~ 512KB	Ver.2.1 以前 Ver.1 非該当	Ver.3 以降 Ver.2 以降 全バージョン																						
80 ピン : R5F10xM 100 ピン : R5F10xP 128 ピン : R5F10xS	96KB ~ 256KB 384KB ~ 512KB 192KB ~ 512KB	Ver.1 非該当 非該当	Ver.2 以降 全バージョン 全バージョン																						

### ・サンプル・バージョンの判別方法

サンプル・バージョンは捺印で判別できます。

以下の例のようにサンプルには製品のサンプル・レベル，サンプル・バージョンが **4文字** で記載されています。サンプル・レベル，サンプル・バージョンの判別用捺印がされていないものはCS品または量産品となります。

例. R5F100LEAFB(64ピン LQFP/64KB) でバージョン 2.0 の ES サンプルの場合

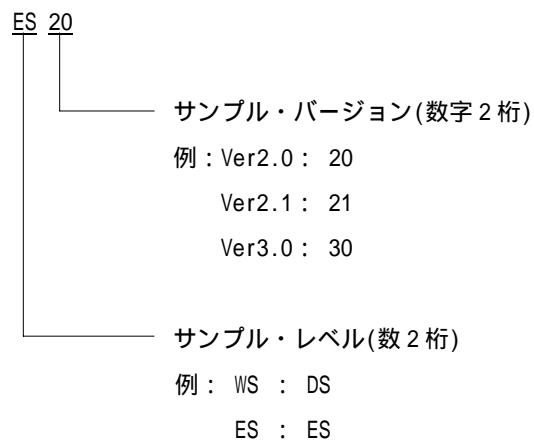
R5F100LEA
11101P900
ES20

1 段目：製品型名

2 段目：製造ロット番号

3 段目：サンプル・レベル(ES) ，サンプル・バージョン(2.0)

サンプル・レベル，サンプル・バージョンの捺印構成



備考. WS はワーキング・サンプル，ES はエンジニアリング・サンプル，CS はコマーシャル・サンプルを表します。

## 2 アプリケーション・ノート

本バージョンは下記のアプリケーション・ノートに対応しています。

マニュアル名	資料番号
RL78 マイクロコントローラ フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ Type01	R01AN0350JJ0100_RL78

## 3 動作環境

IBM PC/AT™互換機版 (Windows®ベース)

OS : WindowsXP , WindowsVista, Windows7

## 4 対応ツール

RL78 マイクロコントローラ フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ Type01 Ver2.00 を使用する場合には、下記のバージョンを使用してください。

ツール名	バージョン
統合開発環境 : CubeSuite	E1.50

## 5 ソフトウェア・リソース

RL78 マイクロコントローラ用 フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ Type01 Ver2.00 を使用する場合には、該当プログラムをユーザ・プログラム領域に配置する必要がありますので、そのコード・サイズ分のプログラム領域を消費します。

また、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリを動作させるためには、スタック、データ・バッファ、ワーク・エリア(セルフ RAM<sup>注</sup>)、を必要とします。

各デバイスで使用するソフトウェア・リソースを表 5-1~表 5-5 に示します。一覧の各項目に対する概要についてはアプリケーション・ノートの「2.2 ソフトウェア環境」をご参照ください。

表 5-1 フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ Type01 ソフトウェア・リソース

項目	容量(バイト)	配置制限・使用制限	
セルフ RAM <sup>注</sup>	0 ~ 1024	RL78/G13 : RAM 4KB、ROM 64KB 製品	FEF00H ~ FF2FFH
		RL78/G13 : RAM 20KB、ROM 256KB 製品 128pin 製品は対象外	FAF00H ~ FB2FFH
		RL78/G13 : RAM 32KB、ROM 512KB 製品	F7F00H ~ F82FFH
		RL78/G12 : RAM 768B 以上の製品	FF900H ~ FFC7FH
		RL78/F12 : RAM 4KB、ROM 64KB 製品	FEF00H ~ FF2FFH
		上記製品以外	なし
スタック <sup>表 5-2</sup>	0 ~ 46	セルフ RAM, FFE20H-FFEFFFH 以外の RAM 領域に展開可能	
データ・バッファ <sup>表 5-3</sup>	0 ~ 256		
ライブラリ・サイズ <sup>表 5-4, 表 5-5</sup>	ROM: MAX 1245	セルフ RAM, FFE20H-FFEFFFH 以外のプログラム領域	
	RAM: 0 ~ 447	セルフ RAM, FFE20H-FFEFFFH, 内蔵 ROM 以外のプログラム領域に展開可能	

注. フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリで固定的にワーク・エリアとして使用する領域を本書、及びアプリケーション・ノートではセルフ RAM と呼びます。

マッピングはされず、フラッシュ・セルフ・プログラミング実行時に自動的に使用される(以前のデータは破壊される)領域のため、ユーザ設定等は必要ありません。フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリを使用していない状態の場合は、通常の RAM 空間として使用できます。

表 5-2 フラッシュ関数のスタック・サイズ

関数名	バイト	関数名	バイト
FSL_Init	40	FSL_GetBlockEndAddr	36
FSL_Open	0	FSL_GetFlashShieldWindow	46
FSL_Close	0	FSL_SwapBootCluster	38
FSL_PrepareFunctions	10	FSL_SwapActiveBootCluster	42
FSL_PrepareExtFunctions	10	FSL_InvertBootFlag	42
FSL_ChangeInterruptTable	30	FSL_SetBlockEraseProtectFlag	42
FSL_RestoreInterruptTable	30	FSL_SetWriteProtectFlag	42
FSL_BlankCheck	42	FSL_SetBootClusterProtectFlag	42
FSL_Erase	42	FSL_SetFlashShieldWindow	42
FSL_IVerify	42	FSL_StatusCheck	30
FSL_Write	42	FSL_StandBy	30
FSL_GetSecurityFlags	46	FSL_WakeUp	42
FSL_GetBootFlag	46	FSL_ForceReset	0
FSL_GetSwapState	36	FSL_GetVersionString	0

表 5-3 フラッシュ関数のデータ・バッファ使用サイズ

関数名	バイト	関数名	バイト
FSL_Init	0	FSL_GetBlockEndAddr	4
FSL_Open	0	FSL_GetFlashShieldWindow	4
FSL_Close	0	FSL_SwapBootCluster	0
FSL_PrepareFunctions	0	FSL_SwapActiveBootCluster	0
FSL_PrepareExtFunctions	0	FSL_InvertBootFlag	0
FSL_ChangeInterruptTable	0	FSL_SetBlockEraseProtectFlag	0
FSL_RestoreInterruptTable	0	FSL_SetWriteProtectFlag	0
FSL_BlankCheck	0	FSL_SetBootClusterProtectFlag	0
FSL_Erase	0	FSL_SetFlashShieldWindow	4
FSL_IVerify	0	FSL_StatusCheck	0
FSL_Write <sup>注</sup>	4 ~ 256	FSL_StandBy	0
FSL_GetSecurityFlags	2	FSL_WakeUp	0
FSL_GetBootFlag	1	FSL_ForceReset	0
FSL_GetSwapState	1	FSL_GetVersionString	0

注. FSL\_Write 関数は書き込みサイズ分(ワード単位)の容量が必要です。

例: 2ワード(1ワード = 4バイト)分の書き込み = 2 × 4 = 8バイト

表 5-4 フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリのコード・サイズ 1 (全て ROM に配置する場合)

- ・ フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリを全て ROM に配置して使用する場合のコード・サイズです。RAM にコードを配置する必要はありませんが、使用方法に制限があり、一部の関数が使用できなくなります。詳細についてはアプリケーション・ノートを参照してください。

コード・サイズの条件	RAM 容量(バイト)	ROM 容量(バイト)
全ての関数を登録した場合のコード・サイズ 一部の関数は使用できません。	0	1245
以下の関数を使用した場合のコード・サイズ <ul style="list-style-type: none"> <li>・ FSL_Init</li> <li>・ FSL_Open</li> <li>・ FSL_Close</li> <li>・ FSL_PrepareFunctions</li> <li>・ FSL_BlankCheck</li> <li>・ FSL_Erase</li> <li>・ FSL_IVerify</li> <li>・ FSL_Write</li> <li>・ FSL_StatusCheck</li> </ul>	0	498

表 5-5 フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリのコード・サイズ 2 (BGO を使用する場合)

- ・ フラッシュ・セルフ・プログラミング中に BGO(バック・グラウンド・オペレーション)機能を使用する場合のコード・サイズです。BGO 機能を使用する場合は FSL\_RCD セグメントを RAM に配置する必要があります。また、FSL\_RCD セグメントを RAM に展開するためにはプログラムの ROM 化処理を行う必要があるため、別途 ROM 化用として FSL\_RCD セグメント分の ROM 容量が必要となります。

コード・サイズの条件	RAM 容量(バイト)	ROM 容量(バイト)
全ての関数を使用した場合のコード・サイズ	447 (FSL_RCD)	798 + ROM 化が必要な容量 (447)
以下の関数を使用した場合のコード・サイズ <ul style="list-style-type: none"> <li>・ FSL_Init</li> <li>・ FSL_Open</li> <li>・ FSL_Close</li> <li>・ FSL_PrepareFunctions</li> <li>・ FSL_BlankCheck</li> <li>・ FSL_Erase</li> <li>・ FSL_IVerify</li> <li>・ FSL_Write</li> <li>・ FSL_StatusCheck</li> </ul>	66 (FSL_RCD)	432 + ROM 化が必要な容量 (66)

備考: 本表はフラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ分のコード・サイズのみについて記載しています。BGO を行う場合はユーザ・プログラムも RAM 上に配置する必要があるため、別途ユーザ・プログラム分のコード・サイズの容量も必要となります。また、ROM 化したプログラムを RAM に展開するプログラム分のコード・サイズも必要となります。ROM 化機能の詳細については使用する予定の開発ツール等のユーザーズ・マニュアルを参照してください。



## 6 フラッシュ・セルフ・プログラミング中の処理時間

この節ではフラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリの処理時間について記載します。

### 6.1 フラッシュ関数処理時間

フラッシュ関数がユーザ・プログラムから実行された後、処理を終了してユーザ・プログラムに戻るまでの時間です。ステータス・チェックのモード設定によって、時間に含まれる処理の内容が異なります。

#### 6.1.1 ステータス・チェック・ユーザ・モード

このモードのフラッシュ関数処理時間の概念を図6-1-1、処理時間を表6-1-1～6-1-2に示します。

図 6-1-1 ステータス・チェック・ユーザ・モードにおけるフラッシュ関数処理時間の概念図

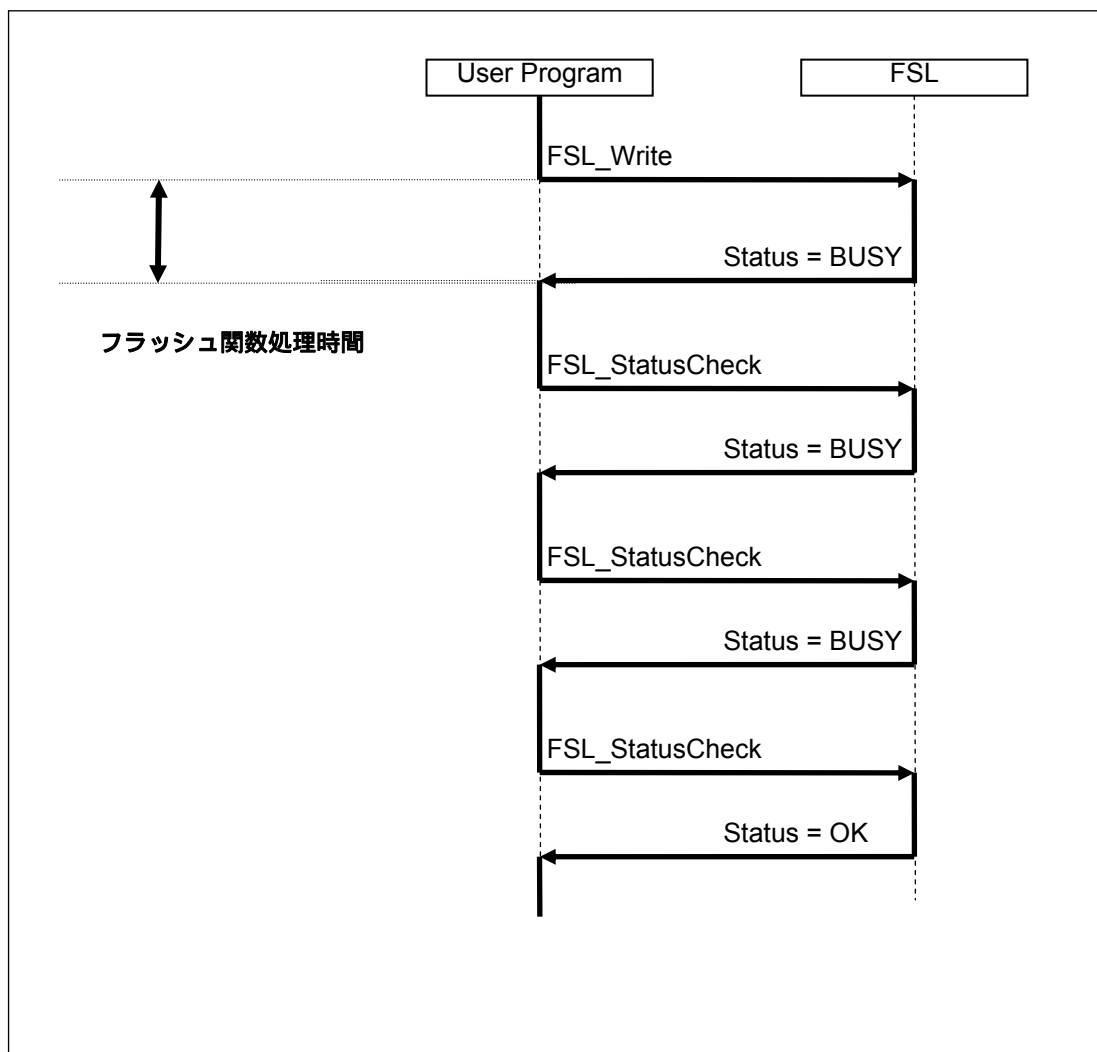


表 6-1-1 ステータス・チェック・ユーザ・モードのフラッシュ関数処理時間 (フル・スピード・モード)

FSL_Function	Max	
FSL_Init	4540 /fclk	$\mu$ s
FSL_PrepareFunctions	2465 /fclk	$\mu$ s
FSL_PrepareExtFunctions	1221 /fclk	$\mu$ s
FSL_ChangeInterruptTable	253 /fclk	$\mu$ s
FSL_RestoreInterruptTable	229 /fclk	$\mu$ s
FSL_Open	10 /fclk	$\mu$ s
FSL_Close	10 /fclk	$\mu$ s
FSL_BlankCheck	2080 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_Erase	2195 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_IVerify	2099 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_Write	2460 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_GetSecurityFlags	331 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetBootFlag	328 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetSwapState	206 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetBlockEndAddr	368 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetFlashShieldWindow	307 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_SetBlockEraseProtectFlag	2351 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SetWriteProtectFlag	2350 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SetBootClusterProtectFlag	2350 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_InvertBootFlag	2345 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SetFlashShieldWindow	2168 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SwapBootCluster	431 /fclk+	32 $\mu$ s
FSL_SwapActiveBootCluster	2328 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_ForceReset	-	
FSL_StatusCheck	802 /fclk+	18 $\mu$ s
FSL_StandBy		
(Erase)	935 /fclk+	31 $\mu$ s
(except Erase) in case of FSL_SetXXX are supported	140004 /fclk+	513812 $\mu$ s
(except Erase) in case of FSL_SetXXX are not supported	76101 /fclk+	35952 $\mu$ s
FSL_WakeUp		
(Suspended Erase)	2144 /fclk+	30 $\mu$ s
(except Erase)	148 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetVersionString	10 /fclk	$\mu$ s

備考. fclk : CPU / 周辺ハードウェア・クロック周波数( 例 : 20Mhz 時の fclk = 20 )

表 6-1-2 ステータス・チェック・ユーザ・モードのフラッシュ関数処理時間 (ワイド・ボルテージ・モード)

FSL_Function	MAX	
FSL_Init	4540 /fclk	$\mu$ s
FSL_PrepareFunctions	2465 /fclk	$\mu$ s
FSL_PrepareExtFunctions	1221 /fclk	$\mu$ s
FSL_ChangeInterruptTable	253 /fclk	$\mu$ s
FSL_RestoreInterruptTable	229 /fclk	$\mu$ s
FSL_Open	10 /fclk	$\mu$ s
FSL_Close	10 /fclk	$\mu$ s
FSL_BlankCheck	2079 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_Erase	2195 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_IVerify	2099 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_Write	2460 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_GetSecurityFlags	331 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetBootFlag	328 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetSwapState	206 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetBlockEndAddr	368 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetFlashShieldWindow	307 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_SetBlockEraseProtectFlag	2351 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SetWriteProtectFlag	2350 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SetBootClusterProtectFlag	2350 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_InvertBootFlag	2345 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SetFlashShieldWindow	2168 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_SwapBootCluster	431 /fclk+	32 $\mu$ s
FSL_SwapActiveBootCluster	2328 /fclk+	30 $\mu$ s
FSL_ForceReset	-	
FSL_StatusCheck	802 /fclk+	18 $\mu$ s
FSL_StandBy		
(case: Erase)	935 /fclk+	44 $\mu$ s
(case: except Erase) in case of FSL_SetXXX are supported	122911 /fclk+	53801 $\mu$ s
(case: except Erase) in case of FSL_SetXXX are not supported	73221 /fclk+	69488 $\mu$ s
FSL_WakeUp		
(case: Erase Suspended)	2144 /fclk+	30 $\mu$ s
(case: except Erase)	148 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetVersionString	10 /fclk	$\mu$ s

備考. fclk : CPU / 周辺ハードウェア・クロック周波数( 例 : 20Mhz 時の fclk = 20 )

## 6.1.2 ステータス・チェック・インターナル・モード

このモードのフラッシュ関数処理時間の概念を図6-1-2，処理時間を表6-1-3～6-1-4に示します。

図 6-1-2 ステータス・チェック・インターナル・モードにおけるフラッシュ関数処理時間の概念図

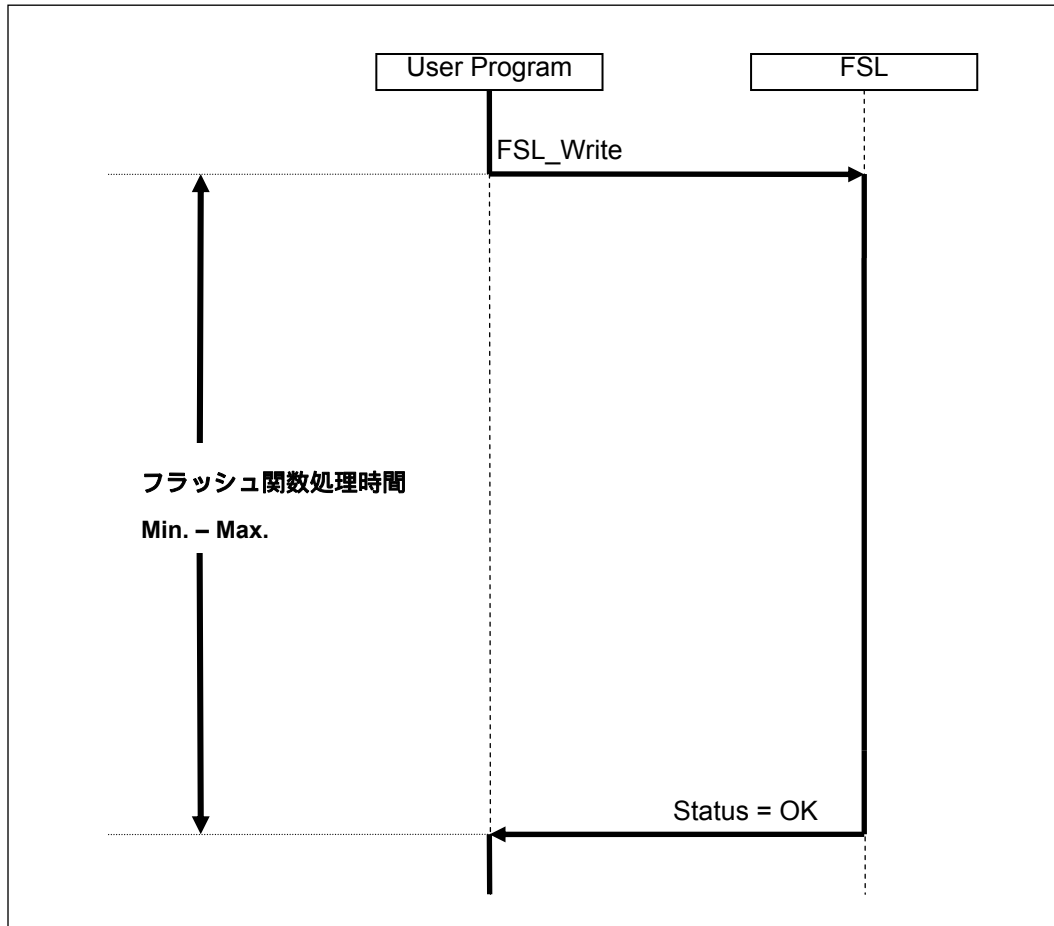


表 6-1-3 ステータス・チェック・インターナル・モードのフラッシュ関数処理時間(フル・スピード・モード)

FSL_Function	Min		Max	
FSL_Init	-		4540 /fclk	$\mu$ s
FSL_PrepareFunctions	-		2465 /fclk	$\mu$ s
FSL_PrepareExtFunctions	-		1221 /fclk	$\mu$ s
FSL_ChangeInterruptTable	-		253 /fclk	$\mu$ s
FSL_RestoreInterruptTable	-		229 /fclk	$\mu$ s
FSL_Open	-		10 /fclk	$\mu$ s
FSL_Close	-		10 /fclk	$\mu$ s
FSL_BlankCheck	3313 /fclk+	84 $\mu$ s	4844 /fclk+	164 $\mu$ s
FSL_Erase	4880 /fclk+	163 $\mu$ s	73342 /fclk+	255366 $\mu$ s
FSL_IVerify	-		10476 /fclk+	1107 $\mu$ s
FSL_Write	3129 /fclk+	66 $\mu$ s	3130 /fclk+	66 $\mu$ s
	+( 595 /fclk+	60 )*W $\mu$ s	+( 1153 /fclk+	561 )*W $\mu$ s
FSL_GetSecurityFlags	-		331 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetBootFlag	-		328 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetSwapState	-		206 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetBlockEndAddr	-		368 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_GetFlashShieldWindow	-		307 /fclk+	0 $\mu$ s
FSL_SetBlockEraseProtectFlag	1574 /fclk+	18 $\mu$ s	140950 /fclk+	513830 $\mu$ s
FSL_SetWriteProtectFlag	1573 /fclk+	18 $\mu$ s	140949 /fclk+	513830 $\mu$ s
FSL_SetBootClusterProtectFlag	1574 /fclk+	18 $\mu$ s	140950 /fclk+	513830 $\mu$ s
FSL_InvertBootFlag	1569 /fclk+	18 $\mu$ s	140945 /fclk+	513830 $\mu$ s
FSL_SetFlashShieldWindow	1385 /fclk+	18 $\mu$ s	140768 /fclk+	513830 $\mu$ s
FSL_SwapBootCluster	-		431 /fclk+	32 $\mu$ s
FSL_SwapActiveBootCluster	1950 /fclk+	50 $\mu$ s	141326 /fclk+	513862 $\mu$ s
FSL_ForceReset	-		-	
FSL_StatusCheck	-		-	
FSL_StandBy	-		-	
FSL_WakeUp	-		-	
FSL_GetVersionString	-		10 /fclk	$\mu$ s

備考 1. fclk : CPU / 周辺ハードウェア・クロック周波数 ( 例 : 20Mhz 時の fclk = 20 )

2. W : 書き込みデータのワード数 ( 1 ワード = 4 バイト )

表 6-1-4 ステータス・チェック・インターナル・モードのフラッシュ関数処理時間(ワイド・ボルテージ・モード)

FSL_Function	Min		Max	
FSL_Init	-		4540 /fclk	μs
FSL_PrepareFunctions	-		2465 /fclk	μs
FSL_PrepareExtFunctions	-		1221 /fclk	μs
FSL_ChangeInterruptTable	-		253 /fclk	μs
FSL_RestoreInterruptTable	-		229 /fclk	μs
FSL_Open	-		10 /fclk	μs
FSL_Close	-		10 /fclk	μs
FSL_BlankCheck	3309 /fclk+	124 μs	4585 /fclk+	401 μs
FSL_Erase	4678 /fclk+	401 μs	64471 /fclk+	266193 μs
FSL_IVerify	-		7661 /fclk+	7534 μs
FSL_Write	3129 /fclk+	66 μs	3130 /fclk+	66 μs
	+( 591 /fclk+	112 )*W μs	+( 1108 /fclk+	1085 )*W μs
FSL_GetSecurityFlags	-		331 /fclk+	0 μs
FSL_GetBootFlag	-		328 /fclk+	0 μs
FSL_GetSwapState	-		206 /fclk+	0 μs
FSL_GetBlockEndAddr	-		368 /fclk+	0 μs
FSL_GetFlashShieldWindow	-		307 /fclk+	0 μs
FSL_SetBlockEraseProtectFlag	1574 /fclk+	18 μs	123857 /fclk+	538032 μs
FSL_SetWriteProtectFlag	1573 /fclk+	18 μs	123856 /fclk+	538032 μs
FSL_SetBootClusterProtectFlag	1574 /fclk+	18 μs	123857 /fclk+	538032 μs
FSL_InvertBootFlag	1569 /fclk+	18 μs	123852 /fclk+	538032 μs
FSL_SetFlashShieldWindow	1385 /fclk+	18 μs	123675 /fclk+	538032 μs
FSL_SwapBootCluster	-		431 /fclk+	32 μs
FSL_SwapActiveBootCluster	1950 /fclk+	50 μs	124233 /fclk+	538064 μs
FSL_ForceReset	-		-	
FSL_StatusCheck	-		-	
FSL_StandBy	-		-	
FSL_WakeUp	-		-	
FSL_GetVersionString	-		10 /fclk	μs

備考 1. fclk : CPU / 周辺ハードウェア・クロック周波数 ( 例 : 20Mhz 時の fclk = 20 )

2. W : 書き込みデータのワード数 ( 1 ワード = 4 バイト )

## 6.2 FSL\_StatusCheck(ステータス・チェック)推奨間隔時間

ステータス・チェック・ユーザ・モードで処理を行う場合、FSL\_StatusCheck関数でステータス・チェックを行いますが、シーケンサの制御が終了する前にFSL\_StatusCheck関数を実行してもあまり意味がないため、各フラッシュ関数で実行している処理毎に、一定の間隔を空ける事によってステータス・チェック処理の効率が向上します。また、FSL\_Write関数による書き込みは、4byte毎にステータス・チェック処理によるトリガーが必要になるため、4byte単位でのステータス・チェック処理が必要となります。

図 6-2-1 FSL\_Write 関数のステータス・チェック間隔時間の概念図(12byte 書き込みの場合)

- ステータス・チェック・ユーザ・モードで 12byte の書き込みを行う場合、シーケンサは 4byte 毎に書き込みを行うため、4byte の書き込み終了時に FSL\_StatusCheck 関数によって次の書き込みへのトリガーが必要となります。4byte 以降の書き込み処理が残っている状態で FSL\_StatusCheck 関数を実行しない場合、次の書き込み処理に遷移できないため、書き込み処理が終了しません。

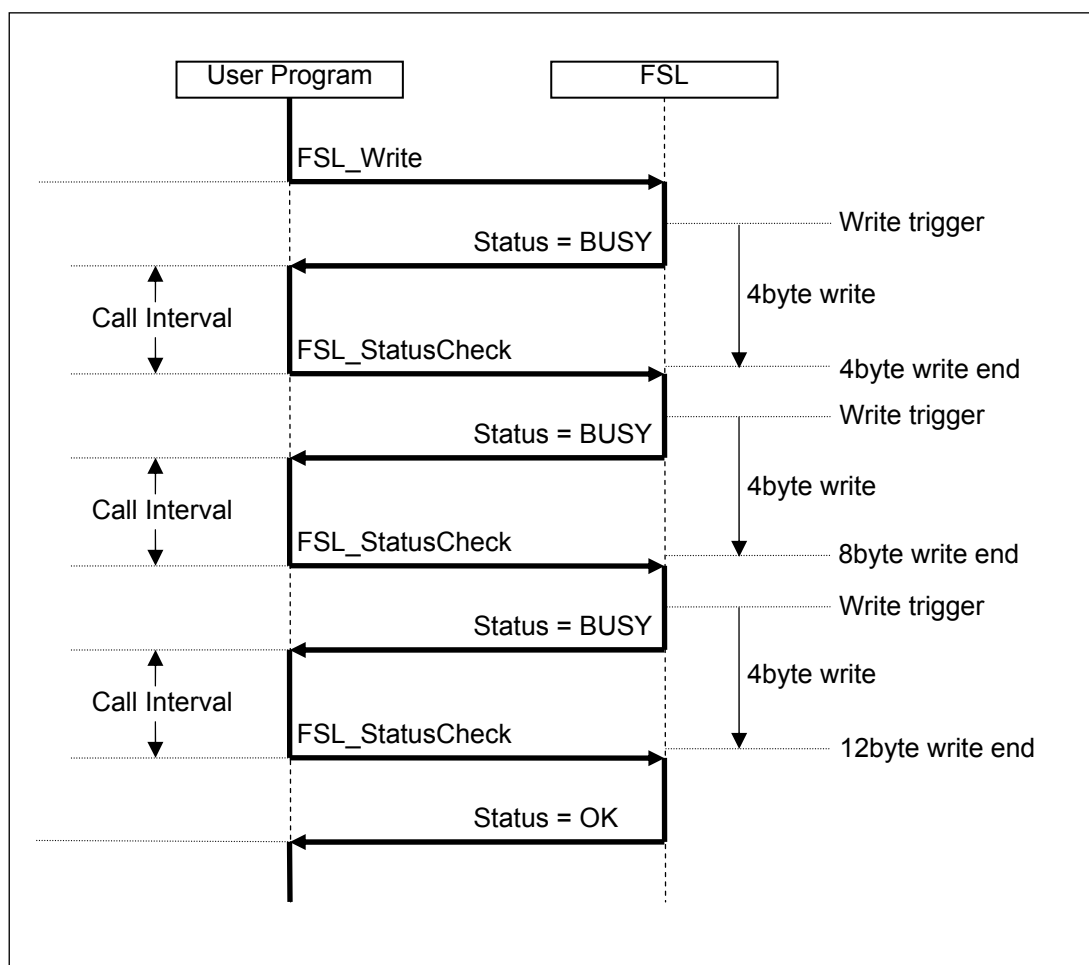


図 6-2-2 FSL\_Write 関数以外のステータス・チェック間隔時間の概念図(消去の場合)

- ・ ステータス・チェック・ユーザ・モードで FSL\_Write 以外の処理を行う場合，シーケンサは全ての処理を終了すまで Busy 状態となり，FSL\_StatusCheck 関数によるトリガーは必要ありません。

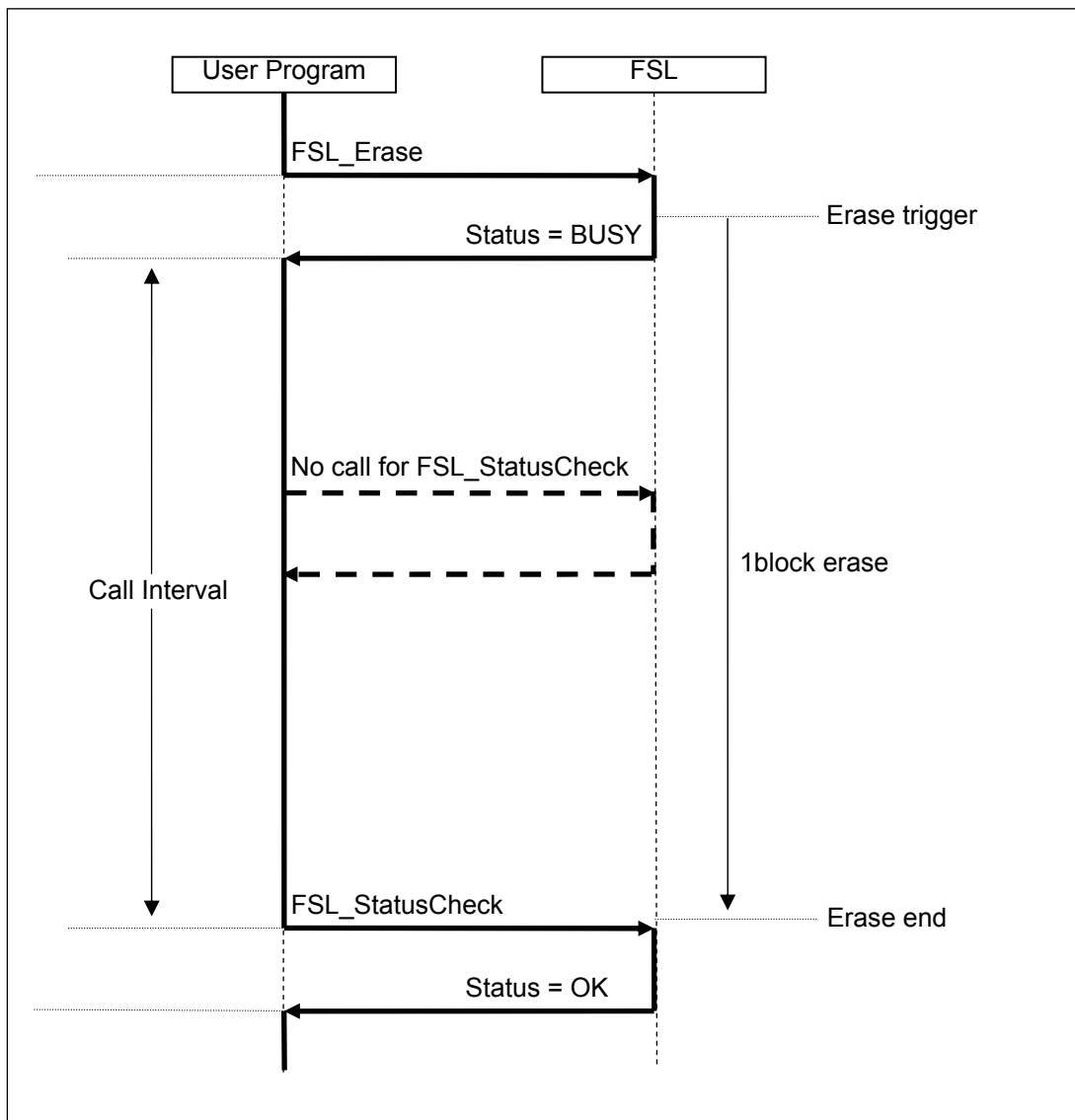




表 6-2-1 FSL\_StatusCheck(ステータス・チェック)推奨間隔時間(フル・スピード・モード)

FSL_Function	Call Interval	
FSL_Init	-	-
FSL_PrepareFunctions	-	-
FSL_PrepareExtFunctions	-	-
FSL_ChangeInterruptTable	-	-
FSL_RestoreInterruptTable	-	-
FSL_Open	-	-
FSL_Close	-	-
FSL_BlankCheck	1569 /fclk+	98 $\mu$ s
FSL_Erase		
(case: block is blanked)	1490 /fclk+	97 $\mu$ s
(case: block is not blanked)	3092 /fclk+	6471 $\mu$ s
FSL_IVerify	7181 /fclk+	1041 $\mu$ s
FSL_Write <sup>注</sup>	72 /fclk+	60 $\mu$ s
FSL_GetSecurityFlags	-	-
FSL_GetBootFlag	-	-
FSL_GetSwapState	-	-
FSL_GetBlockEndAddr	-	-
FSL_GetFlashShieldWindow	-	-
FSL_SetBlockEraseProtectFlag	6431 /fclk+	7053 $\mu$ s
FSL_SetWriteProtectFlag	6431 /fclk+	7053 $\mu$ s
FSL_SetBootClusterProtectFlag	6431 /fclk+	7053 $\mu$ s
FSL_InvertBootFlag	6431 /fclk+	7053 $\mu$ s
FSL_SetFlashShieldWindow	6431 /fclk+	7053 $\mu$ s
FSL_SwapBootCluster	-	-
FSL_SwapActiveBootCluster	6431 /fclk+	7053 $\mu$ s
FSL_ForceReset	-	-
FSL_StatusCheck	-	-
FSL_StandBy	-	-
FSL_WakeUp		
(case: block is blanked)	1490 /fclk+	97 $\mu$ s
(case: block is not blanked)	3092 /fclk+	6471 $\mu$ s
FSL_GetVersionString	-	-

備考. fclk : CPU / 周辺ハードウェア・クロック周波数(例 : 20Mhz 時の fclk = 20 )

注. FSL\_Write 関数は 4 バイト毎の推奨間隔時間

表 6-2-2 FSL\_StatusCheck(ステータス・チェック)推奨間隔時間(ワイド・ボルテージ・モード)

FSL_Function	Call Interval	
FSL_Init	-	
FSL_PrepareFunctions	-	
FSL_PrepareExtFunctions	-	
FSL_ChangeInterruptTable	-	
FSL_RestoreInterruptTable	-	
FSL_Open	-	
FSL_Close	-	
FSL_BlankCheck	1310 /fclk+	335 $\mu$ s
FSL_Erase		
(case: block is blanked)	1289 /fclk+	335 $\mu$ s
(case: block is not blanked)	2689 /fclk+	6959 $\mu$ s
FSL_IVerify	4366 /fclk+	7468 $\mu$ s
FSL_Write <sup>注</sup>	67 /fclk+	112 $\mu$ s
FSL_GetSecurityFlags	-	
FSL_GetBootFlag	-	
FSL_GetSwapState	-	
FSL_GetBlockEndAddr	-	
FSL_GetFlashShieldWindow	-	
FSL_SetBlockEraseProtectFlag	5728 /fclk+	8445 $\mu$ s
FSL_SetWriteProtectFlag	5728 /fclk+	8445 $\mu$ s
FSL_SetBootClusterProtectFlag	5728 /fclk+	8445 $\mu$ s
FSL_InvertBootFlag	5728 /fclk+	8445 $\mu$ s
FSL_SetFlashShieldWindow	5728 /fclk+	8445 $\mu$ s
FSL_SwapBootCluster	-	
FSL_SwapActiveBootCluster	5728 /fclk+	8445 $\mu$ s
FSL_ForceReset	-	
FSL_StatusCheck	-	
FSL_StandBy	-	
FSL_WakeUp		
(case: block is blanked)	1289 /fclk+	335 $\mu$ s
(case: block is not blanked)	2689 /fclk+	6959 $\mu$ s
FSL_GetVersionString	-	

備考. fclk : CPU / 周辺ハードウェア・クロック周波数(例 : 20Mhz 時の fclk = 20 )

注. FSL\_Write 関数は 4 バイト毎の推奨間隔時間

## 7 インストール

この節では、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリのインストールとアンインストールの手順について説明します。

### 7.1 インストール方法

フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリのインストールは次の手順で行います。

- (1) Windowsを起動します。
- (2) フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリが入っている圧縮ファイルを解凍し、展開されたフォルダをユーザ任意の場所に配置します。

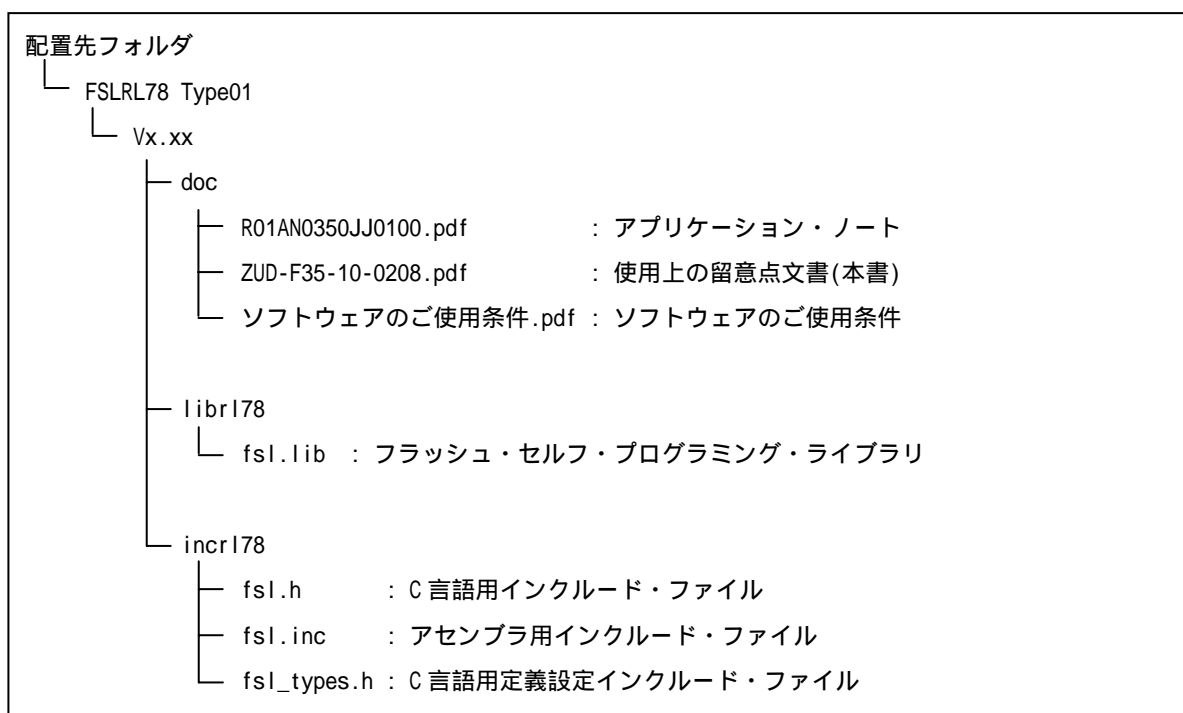
### 7.2 アンインストール方法

フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリのアンインストールは次の手順で行います。

- (1) Windowsを起動します。
- (2) ユーザ任意の場所に配置したフラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリが入っているフォルダを削除します。

### 7.3 ファイル構成

フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリが入っている圧縮ファイルを解凍し、展開されるファイルの構成は、次のとおりです。



## 8 ビルド方法

この節では、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリを用いたプログラムのビルドの手順を説明します。

### 8.1 使用するソフトウェア

フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリを用いたプログラムをビルドするには、次の統合開発環境が必要です。

- ・統合開発環境 CubeSuite E1.50

### 8.2 CubeSuite でのビルド方法

CubeSuite を用いてフラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリをユーザ・プログラムに組み込んで、ビルドする手順を説明します。

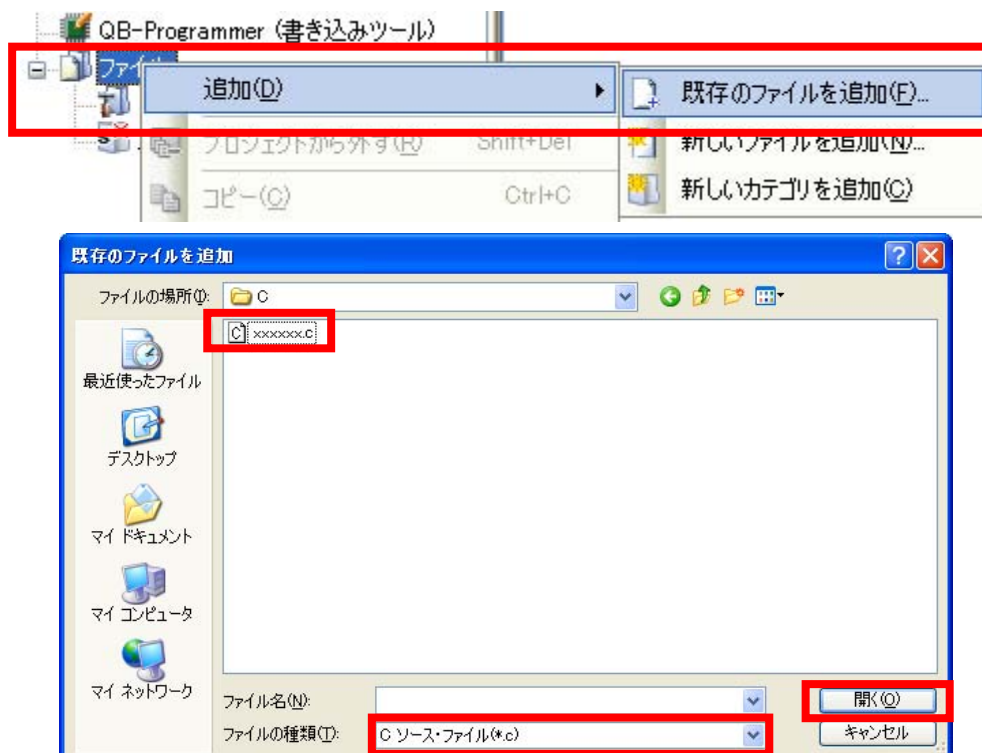
#### 8.2.1 C 言語の場合

##### (1) プロジェクトの作成とソース・ファイルの設定

CubeSuite でプロジェクトを作成し、表示された画面の左側にある[ プロジェクト・ツリー ]から、[ ファイル ]を右クリックして表示されるリストの[ 追加 ]を選択し、[ 既存のファイルを追加 ]をクリックすると、[ 既存のファイルを追加 ]画面が表示されます(図 8-1)。

次に画面中にある[ ファイルの種類 ]のプルダウンメニューをクリックすると、ファイルの種類の一覧が表示されるので、その中にある[ C ソース・ファイル(\*.c) ]を選択し、ソース・ファイルとしてユーザ・プログラムのファイルを登録してください。

図 8-1 ソース・ファイルの指定

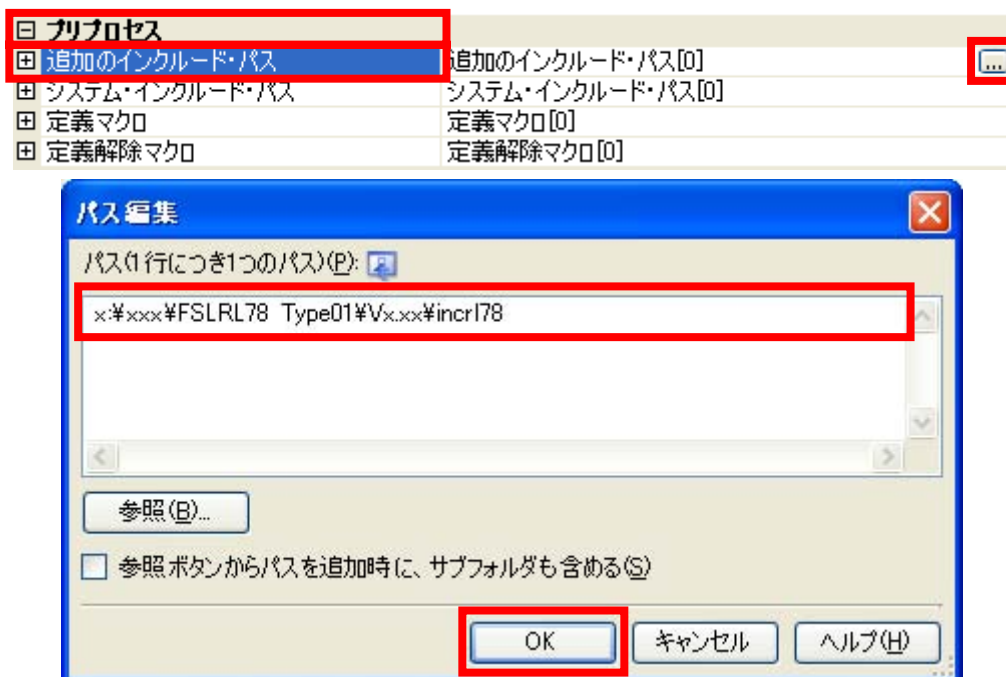


## (2) インクルード・ファイル・パスの設定

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある,[ CA78K0R(ビルド・ツール) ]をクリックして CA78K0R のプロパティ画面を開き, 下部にある[ コンパイル・オプション ]タブをクリックすると, コンパイル・オプション画面が表示されます。

次に画面中にある[ プリプロセス ]をクリックし,項目を表示させて[ 追加のインクルード・パス ]の欄を選択し,右に表示される[ ... ]ボタンをクリックすると,[ パス編集 ]ダイアログ画面が表示されるので,画面中のテキスト・ボックスに,フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ用のヘッダ・ファイルがあるフォルダのパスを入力します(図 8-2)。 [ 参照 ] ボタンをクリックして,マウス操作により指定することもできます。

図 8-2 インクルード・ファイルの指定



## (3) ライブラリ・ファイルの設定

ライブラリ・ファイルをプロジェクトで使用するための設定は2通りの方法があります。

### ・プロジェクトにライブラリ・ファイルを登録する方法

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある,[ ファイル ]を右クリックして表示されるリストから[ 追加 ]を選択し,[ 既存のファイルを追加 ]をクリックすると,[ 既存のファイルを追加 ]画面が表示されます(図 8-3)。

次に画面中にある[ ファイルの種類 ]のプルダウンメニューをクリックすると,ファイルの種類の一覧が表示されるので,その中にある[ ライブラリ・ファイル(\*.lib) ]を選択し,フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ (fsl.lib) のファイルを登録してください。

### ・ライブラリ・ファイルのフォルダ・パスを設定し,使用するライブラリ名を指定する方法

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある,[ CA78K0R(ビルド・ツール) ]をクリックして CA78K0R のプロパティ画面を開き, 下部にある[ リンク・オプション ]タブをクリックすると,リ

ンク・オプション画面が表示されます。

次に画面中の[ ライブラリ ]の項目にある[ 追加のライブラリ・パス ]の欄を選択し、右に表示される[ ... ]ボタンをクリックすると、[ パス編集 ]ダイアログ画面が表示されるので、画面中のテキスト・ボックスに、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリがあるフォルダのパスを入力します(図8-4)。[ 参照 ] ボタンをクリックして、マウス操作により指定することもできます。

フォルダ・パスの設定後、[ ライブラリ ]の項目にある[ 使用するライブラリ・ファイル ]の欄を選択し、右に表示される[ ... ]ボタンをクリックすると、[ テキスト編集 ]ダイアログ画面が表示されるので、画面中のテキスト・ボックスに、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ( fsl.lib )のファイル名を設定してください(図8-5)。ファイル名はフォルダ・パスを含めて設定することも可能です。

図 8-3 ライブラリ・ファイルの指定

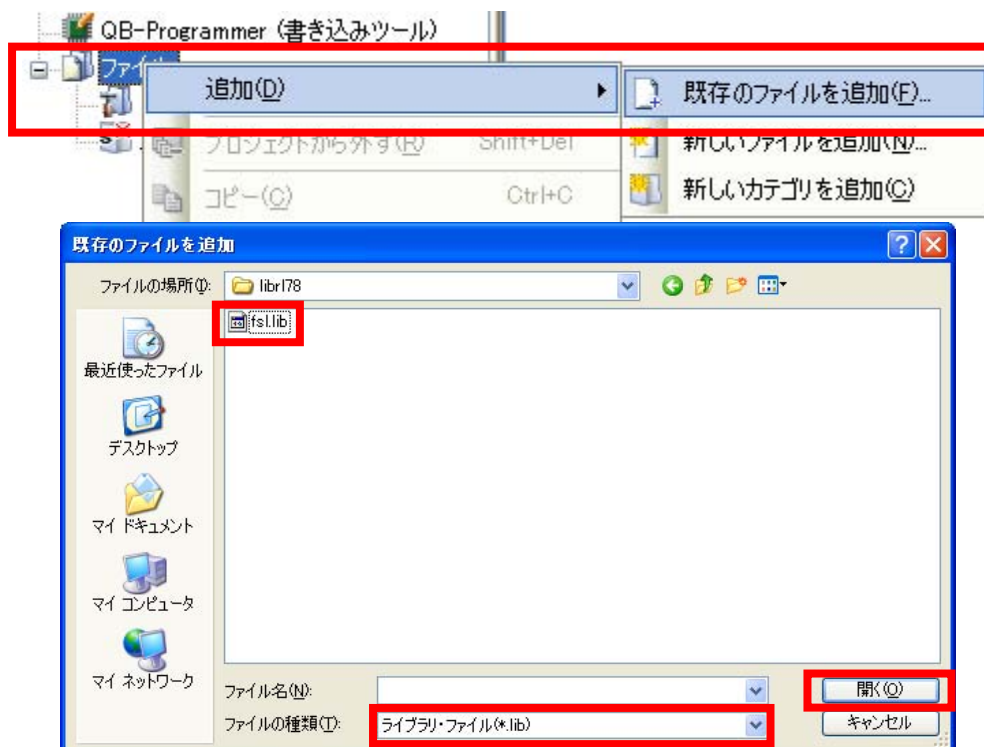


図 8-4 ライブラリ・ファイルのフォルダ・パスを指定

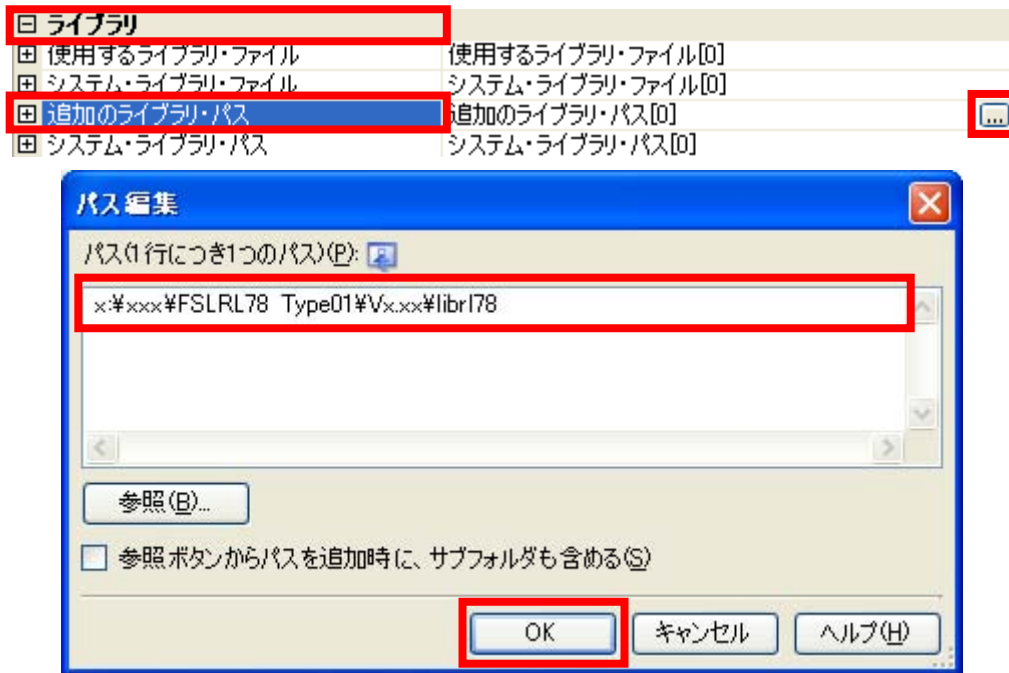
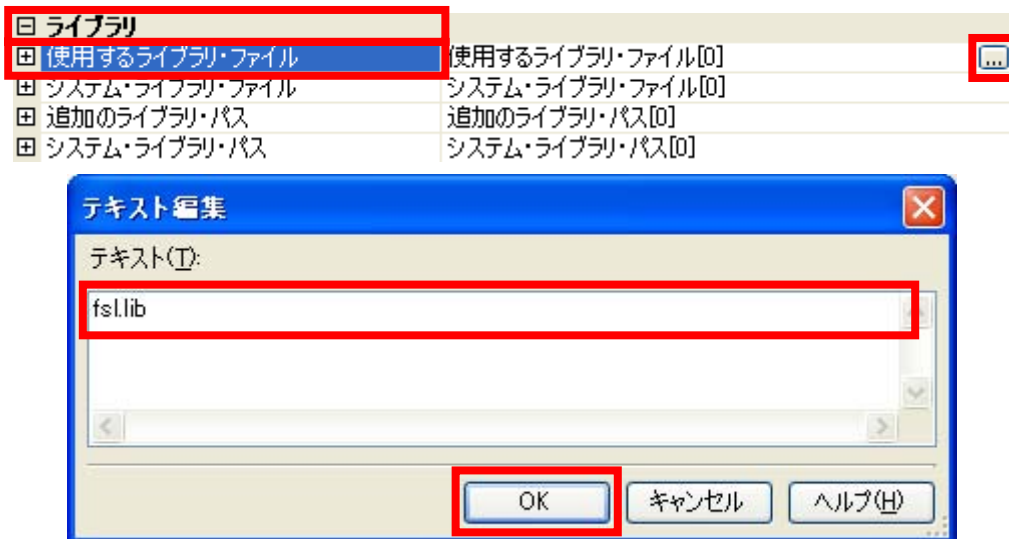


図 8-5 使用するライブラリ・ファイル名の設定

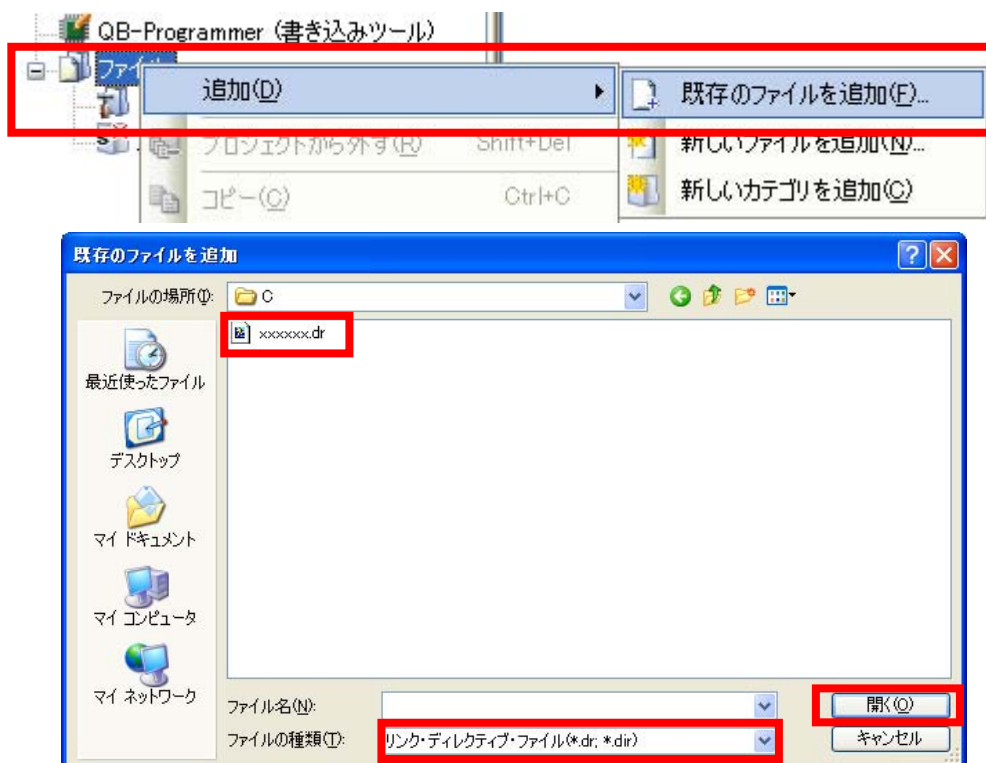


#### (4) リンク・ディレクティブの設定

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある,[ ファイル ]を右クリックして表示されるリストから[ 追加 ]を選択し,[ 既存のファイルを追加 ]をクリックすると,[ 既存のファイルを追加 ]画面が表示されます(図8-6)。

次に画面中にある[ ファイルの種類 ]のプルダウンメニューをクリックすると,ファイルの種類の一覧が表示されるので,その中にある[ リンク・ディレクティブ・ファイル(\*.dr;\*.dir) ]を選択し,リンク・ディレクティブ・ファイル名のユーザ・ファイルを登録してください。

図 8-6 リンク・ディレクティブ・ファイルの指定



#### (5) ビルド

CubeSuite のメニュー [ ビルド ] [ ビルド・プロジェクト ] をクリックして,ビルドを実行します。



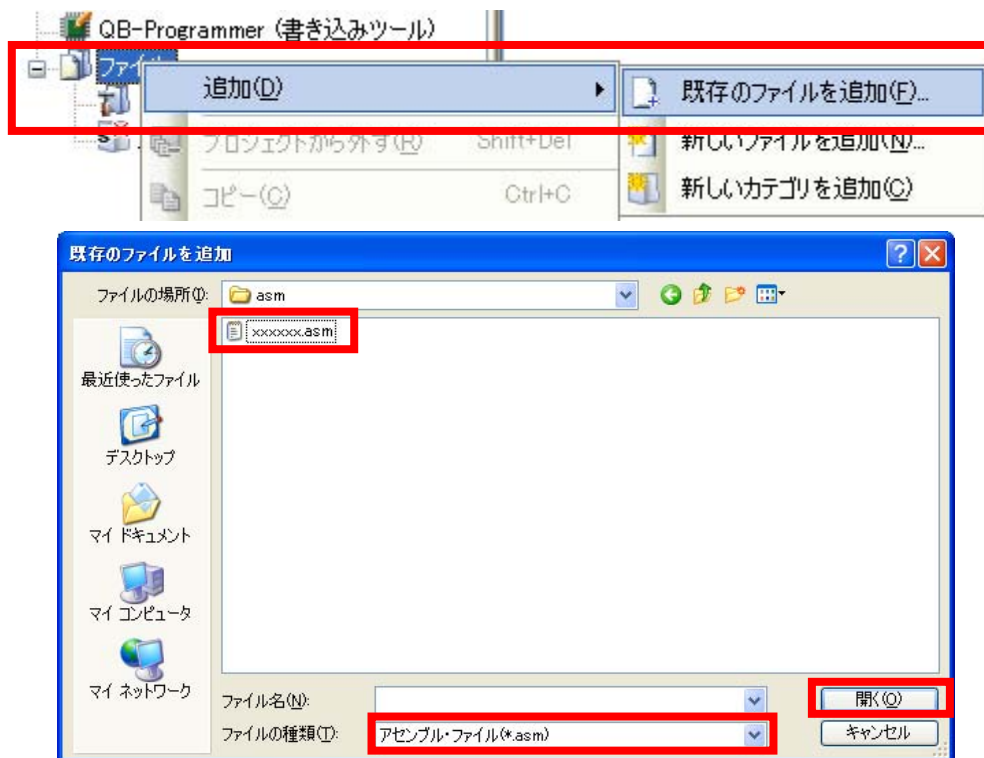
## 8.2.2 アセンブリ言語の場合

### (1) プロジェクトの作成とソース・ファイルの設定

CubeSuite でプロジェクトを作成し、表示された画面の左側にある[ プロジェクト・ツリー ]から、[ ファイル ]を右クリックして表示されるリストの[ 追加 ]を選択し、[ 既存のファイルを追加 ]をクリックすると、[ 既存のファイルを追加 ]画面が表示されます(図8-7)。

次に画面中にある[ ファイルの種類 ]のプルダウンメニューをクリックすると、ファイルの種類の一覧が表示されるので、その中にある[ アセンブル・ファイル(\*.asm) ]を選択し、ソース・ファイルとしてユーザ・ファイルを登録してください。

図 8-7 ソース・ファイルの指定

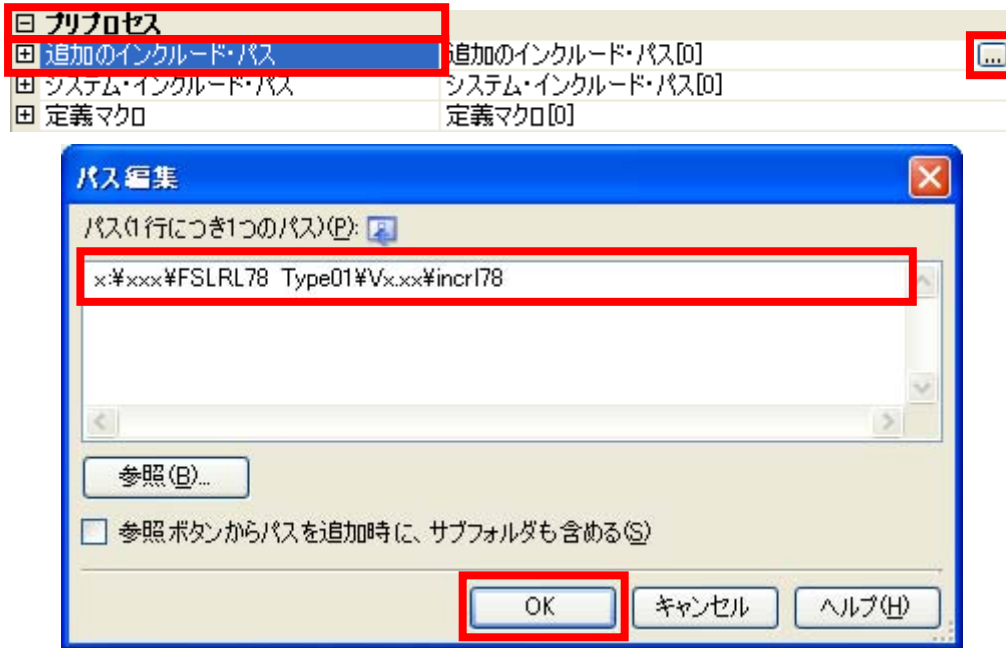


### (2) インクルード・ファイル・パスの設定

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある,[ CA78K0R(ビルド・ツール) ]をクリックして CA78K0R のプロパティ画面を開き、下部にある[ アセンブル・オプション ]タブをクリックすると、アセンブル・オプション画面が表示されます。

次に画面中にある[ プリプロセス ]をクリックし、項目を表示させて[ 追加のインクルード・パス ]の欄を選択し、右に表示される[ ... ]ボタンをクリックすると、[ パス編集 ]ダイアログ画面が表示されるので、画面中のテキスト・ボックスに、フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ用のヘッダ・ファイルがあるフォルダのパスを入力します(図8-8)。「参照」ボタンをクリックして、マウス操作により指定することもできます。

図 8-8 インクルード・ファイルの指定



### (3) ライブラリ・ファイルの設定

ライブラリ・ファイルをプロジェクトで使用するための設定は2通りの方法があります。

#### ・プロジェクトにライブラリ・ファイルを登録する方法

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある, [ ファイル ]を右クリックして表示されるリストから[ 追加 ]を選択し, [ 既存のファイルを追加 ]をクリックすると, [ 既存のファイルを追加 ]画面が表示されます(図 8-9)。

次に画面中にある[ ファイルの種類 ]のプルダウンメニューをクリックすると, ファイルの種類の一覧が表示されるので, その中にある[ ライブラリ・ファイル(\*.lib) ]を選択し, フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ (fsl.lib) のファイルを登録してください。

#### ・ライブラリ・ファイルのフォルダ・パスを設定し, 使用するライブラリ名を指定する方法

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある, [ CA78K0R(ビルド・ツール) ]をクリックして CA78K0R のプロパティ画面を開き, 下部にある[ リンク・オプション ]タブをクリックすると, リンク・オプション画面が表示されます。

次に画面中の[ ライブラリ ]の項目にある[ 追加のライブラリ・パス ]の欄を選択し, 右に表示される[ ... ]ボタンをクリックすると, [ パス編集 ]ダイアログ画面が表示されるので, 画面中のテキスト・ボックスに, フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリがあるフォルダのパスを入力します(図 8-10)。 [ 参照 ] ボタンをクリックして, マウス操作により指定することもできます。

フォルダ・パスの設定後, [ ライブラリ ]の項目にある[ 使用するライブラリ・ファイル ]の欄を選択し, 右に表示される[ ... ]ボタンをクリックすると, [ テキスト編集 ]ダイアログ画面が表示されるので, 画面中のテキスト・ボックスに, フラッシュ・セルフ・プログラミング・ライブラリ (fsl.lib) のファイル名を設定してください(図 8-11)。ファイル名はフォルダ・パスを含めて設定することも可能です。

図 8-9 ライブラリ・ファイルの指定

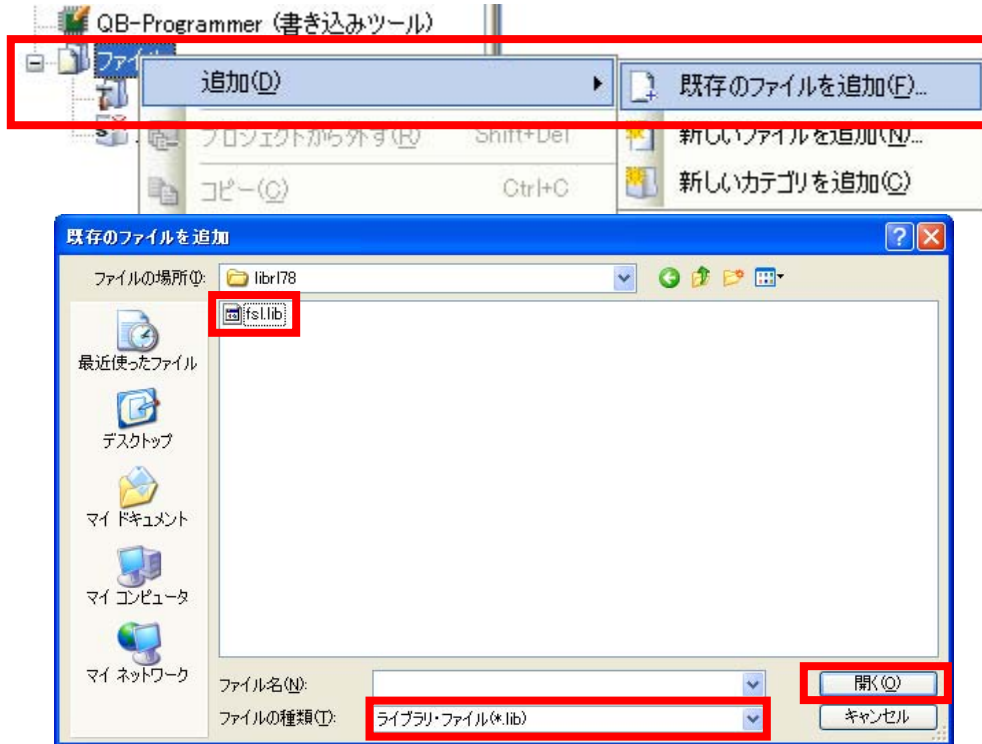


図 8-10 ライブラリ・ファイルのフォルダ・パスを指定

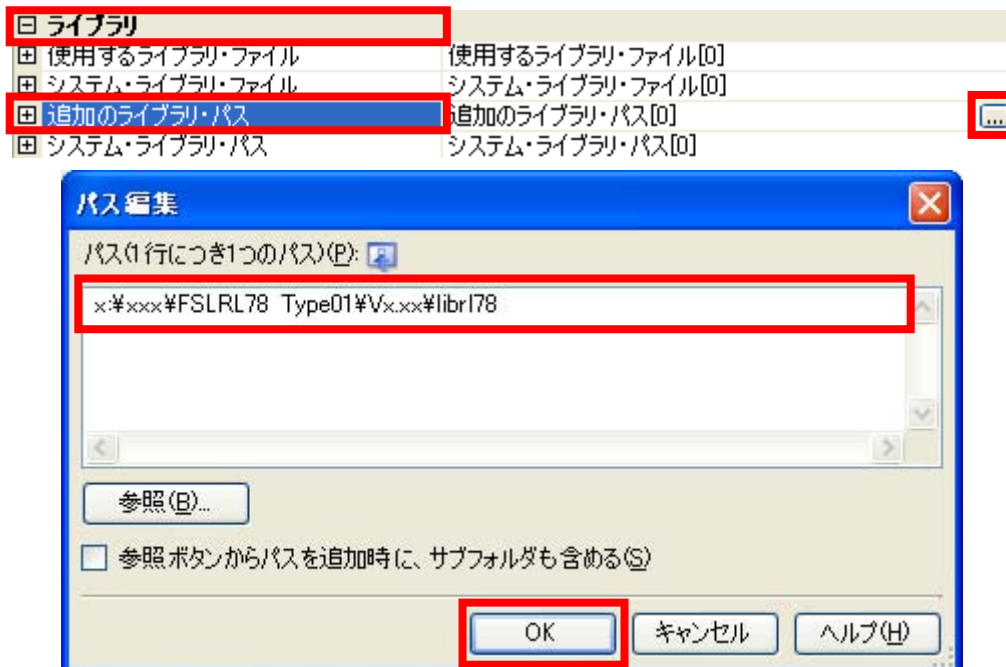
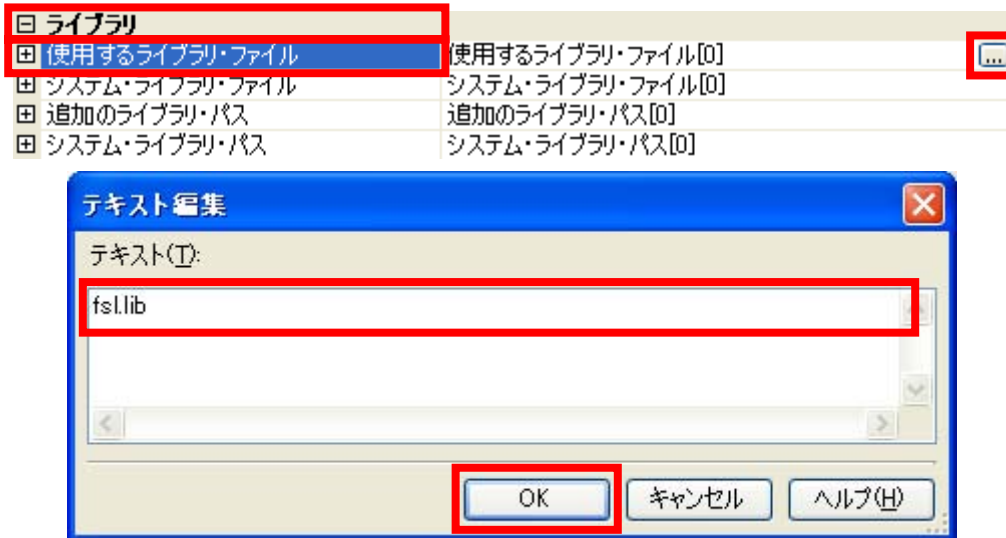


図 8-11 使用するライブラリ・ファイル名の設定

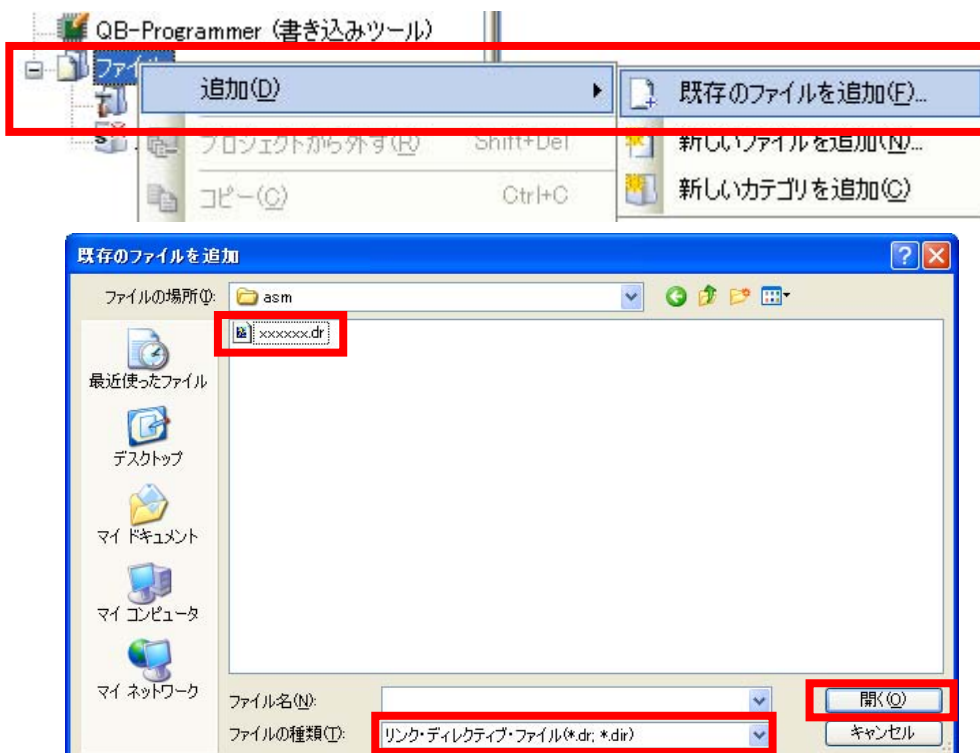


#### (4) リンク・ディレクティブの設定

CubeSuite の[ プロジェクト・ツリー ]にある,[ ファイル ]を右クリックして表示されるリストから[ 追加 ]を選択し,[ 既存のファイルを追加 ]をクリックすると,[ 既存のファイルを追加 ]画面が表示されます(図 8-12)。

次に画面中にある[ ファイルの種類 ]のプルダウンメニューをクリックすると,ファイルの種類の一覧が表示されるので,その中にある[ リンク・ディレクティブ・ファイル(\*.dr;\*.dir) ]を選択し,リンク・ディレクティブ・ファイル名のユーザ・ファイルを登録してください。

図 8-12 リンク・ディレクティブ・ファイルの指定



## (5) ビルド

CubeSuite のメニュー [ ビルド ] [ ビルド・プロジェクト ] をクリックして、ビルドを実行します。

## 9 デバッグ方法

IECUBE , または オンチップ・デバッグ・エミュレータ E1 を使用してデバッグを行う場合につきましては以下の資料のご参照ください。

- ・ ユーザーズ・マニュアル「CubeSuite RL78,78K0R デバッグ編」